

コメニウスにおける幼児教育論の展開とその背景

井ノ口淳三

1

コメニウス (Johann Amos Comenius, 1592 ~1670) は、西洋教育史上、体系的な教授学を基礎づけた最初の人として、“近代教育学の祖”と仰がれる位置にあるが、『幼児教育史』を著わしたラスク (Robert, R. Rusk) が「幼児教育についての著書をのこした最初の大教育者であった¹⁾」と呼んでいるように、幼児教育に関しても先駆的な思想をもっていた。しかし、幼児教育の通史を含めて、これまでコメニウスの幼児教育論に言及している研究書のほとんどは、『大教授学 (Didactica Magna, 1638)』や『母親学校指針 (Informatorium maternum, 1633)』にみられる思想の紹介に重点をおいており、コメニウスの教育思想の発展全体の中で、幼児教育がいかに位置づけられるかという点については、いまだ十分に明らかにはされていないといえよう。

私見によれば、コメニウスの幼児教育論は、『大教授学』や『母親学校指針』等の1630年代の著作と晩年の『汎教育 (Pampaedia, 1657年以降に執筆)』とでは、微妙な、しかし看過できない変化を見せているように思われる。たとえば、前者においては、コメニウスは6才までの幼児を各家庭で直接母親が教育することを理想としているが、後者では、必ずしもそれに固執していない。また『汎教育』では、それ以前のコメニウスの著作における幼児教育への視点を基本的にうけつぎつつも、幼児だけでなく幼児を教育する成人の教育にも多大な関心が払われている。この成人の教育に対するコメニウスの関心は、十全な幼児教育を実現するための両親教育の充実という方向のみではなく、さらに、彼の汎知学思想の体系化の進展と関連して逆に

強められた面もあるのではあるまいか。一般にコメニウスの教育思想を考察する場合には、汎知学思想とのかかわりについての分析が重要となるが²⁾、この視点は幼児教育論という個別のテーマに着目する場合にも貫かれなければならないように思われる。今ひとつは、晩年における政治的状況が、コメニウスに与えた影響との関連である。したがって、本論の課題は、上記の著作におけるコメニウスの幼児教育論の推移を手がかりとして、幼児教育の位置づけ方が、彼の思想全体の発展の中でどのように変化していったのか、また、この変化が何に起因するものであるかを彼の教授学と汎知学思想の発展及び政治的状況の3点からあとづけることにある。

2

もともとコメニウスの思想と生涯を貫いていたのは、三十年戦争の長い戦禍と亡命生活の体験から、何よりもこの地上に再び平和を取り戻し、亡命者達もやがては祖国へ帰還して、民衆が荒廃した生活を再建できる日のくることを念願するという、強い人類的ならびに民族的動機であった³⁾。そして彼は、この人類の苦境を救うには、「青少年を正しく教育する以外に有効な道はほかにない⁴⁾」と考え、まずこのために必要な新しい学校と教授法を確立しようとしたのである。

コメニウスは、後にラテン語で書き改められる『大教授学』の基本的内容を、まず母国語であるチェコ語を用いて表現した。その『教授学 (Didactica, 1632)』の第7章において、彼は特に幼児期からの教育の必要性の根拠を次の5点に整理している⁵⁾。すなわち、①人間の生命の不確実性、②人間形成という課題の巨大性、

③幼児の陶冶性の大きさ、④幼児の習慣形成の重要性、⑤幼児の魂の汚染の危険性、である。

これは『大教授学』にもほぼ同様の内容で継承されているが、大教授学では、③と④の根拠の間に、“人間における成長期間の長さ”がつけ加えられているので、あわせて6項目となっている⁶⁾。

幼児期の教育を重視するコメニウスの主張の一端は、この章以外にも散見される。たとえば『大教授学』の第10章では、人間の全生涯は、子どもの時期の教育に依存している、と述べ⁷⁾、また第23章では、幼い頃からのいち早い教育によってあらゆる人が理性に基づいて行動するようになれば、地上の混乱も改善できる、と言う⁸⁾。このようにコメニウスが幼児からの教育を重視する理由の一つは、「初めの基礎固めを確実にこなうことが、後で着実に成長していく上で有効である⁹⁾」という、植物や動物の生長にみる経験的知識にあるが、より根本的には、子どもは大人とちがってまだ罪と不信仰に身をけがされていない存在であるという認識に基づいている。彼は聖書の中の次のような言葉を引用しつつ、子ども達だけが神の王国にふさわしい存在であると主張する。「幼な子がわれのもとに来たるのを許せ、これをとどめてはならない。なぜなら、天国はこのような者のためのものであるから¹⁰⁾。」「汝ら大人は、幼な子のようになるのでなければ、天の王国に入ることはできないであろう¹¹⁾。」と。周知のように、キリスト教においては、人間の悪は人間の罪の結果であり、人間の罪とは神への不信仰、すなわち自らが神に創られた存在であることを忘れ、創造主に逆らい自己主張する傲慢にある。したがって、いまだ傲慢を知らず純な信頼の心をもった幼児のほかには、「神の教えようとするものはいない¹²⁾」し、子どもの教育こそ破滅の唯一の救済策なのである。コメニウスは、キリスト教信仰におけるアダムの墮落に始まる破滅が、人類全体を貫いているという側面よりも、むしろ第二のアダムたるキリストが地上につかわさ

れることによって、全人類が救済の保証を得たことの意義の方を重視し、そして「私達がいつまでも破滅を騒ぎたてるばかりで、復活について考えないのは醜悪であり、古いアダムが私達にのしかかる重みだけを見て、新しいアダムたるキリストの重みをみないのは、神をけがすものである¹³⁾」と言い、また「破滅の救済策について考えることができる限りは、破滅を騒がないでほしい¹⁴⁾」と述べている。コメニウスは、キリストによって聖められた子ども達が、知恵と徳行と敬神の心をそなえた人間に成長していくことを、キリストという生命の樹に新しく接木された若枝が実を結んでいくという比喻によって説明しようとしている。いったん接木されたこの樹から再び引きはがされ実を結ばないような事態が起りうるとすれば、それはその後の人間の不信仰が原因となって生ずるものである。逆にいえば、人間が新たに不信仰をおこさない限り、彼は神の恩寵から見放されることはないのである。したがって、人間が敬神の心をもって生きるのか、あるいは不信仰に陥いるのかということ、主として地上における人間の生き方にかかわることであり、そこに現世の教育が決定的な意味をもってくる所以があったのである。

3

さて、コメニウスが、『大教授学』で人間の成長期を6年ごとに四つの段階に区切って考察していることは周知のところである。このうち、6才までの子どもは、各家庭で、母親の膝の上で教育される。彼はこの教育的に配慮された家庭を母親学校と呼んでいる。

『教授学』の第27章でも、この母親学校に言及しているが、そこではその教育の内容を次のように説明している。すなわち、母国語を理解し表情豊かに話せること、徳育の面では年長者を尊敬し、両親にわがままをいわないこと、敬神の心を育てる教育として、毎日神に祈ることが習慣になること、その際ひざまづき手を合わ

せること、教理問答から二、三の容易な問題および若干の賛美歌を学ぶことなどである。『教授学』のこの章は、『大教授学』と比べて全般に記述が簡略である。しかもその半分以上は、祈る時にはまわりを見まわさず眼は高く見上げるか伏せておくこと、というような敬神の細かな作法や注意にあてられているのが特徴的である¹⁵⁾。

これに対して『大教授学』では、相対的に知育の側面が詳しく述べられている¹⁶⁾。コメニウスは、一生の役に立つことを全てこの最初の学校のうちに教え込んでやらなくてはならないと言って、そこで20におよぶ教科目をとりあげている。すなわち、形而上学、自然学、光学、天文学、地理学、年代学、歴史、算術、幾何学、計量学、工作労働、弁証法、文法、修辞学、詩、音楽、家政学、政治学、倫理学、宗教である。これらを知育・体育・美育・徳育に分類するならば、半分以上は知育の範疇に含まれるであろう。ただここにあげられた学科の名称は、幼児の学校にしては大仰であるが、コメニウスの示している内容をみれば、彼がけっして無理なことを要求しているのではなく、今日からみても妥当なものであることがわかる。たとえば、光学の項目では、光や闇や形を見分け、主な色を識別させることが提案されているが、ラスクはこの点に関して、知能に関するビネー (Alfred Binet) の尺度を想起させるものであると評価している¹⁷⁾。また知育の範疇に含めてもよいと考えられる科目においても、子どもに知識を詰め込むというよりは、知りたいという子どもの自然な気持ちを抑えることなく伸ばしてやるという原則が貫かれていることに注意しなければならない。その目標とするところは、本来子どもが生活の中で自然に理解し覚えていくものを上手に指導するということなのである。コメニウスは、倫理学の項目では12の徳目について説明しているが、それらは尊敬や正義や友愛など、とりたてて目新しいものではない。ただ工作労働の科目とは別に倫理学の中で労働の訓練を強

調していることが目につくが、これは、人間が他と出会い、己れを知るのは、積極的な労働を介してであり、この他とのかかわりにおける自己の位置と責任を学ぶのが倫理の基本であることからみて、興味深いものがあると同時に、コメニウスの属している同胞教団の教育観の反映をうかがわせるものであろう。また、神への帰依の学習は、『教授学』の細部にわたる記述とくらべると、大変簡素化されているが、しかし、教理問答の学習に際して「年令に応じてのみ込める箇所や実際に練習できる箇所を暗誦させるところまで進むことができる¹⁸⁾」と記されているように、子どもの発達段階に即した教育が主張されているといえる。

母親学校の内容は以上のようなものであるがコメニウスは、最後に両親および乳母のための手引き書を刊行することと、子ども用に小さな絵入りの本を書くことを予告して、この章を終えている。

ここで触れられている両親および乳母のための手引き書が『母親学校指針』である。これはコメニウスが、ボヘミアを追われ、ポーランドのレシュノへ亡命して以後最初にとりかかった著作である。この書物は12章から成っており、この第4章が、内容的には大教授学の第28章と相応している¹⁹⁾。『大教授学』ではやや羅列的に並べられているきらいのある学科目は、母親学校指針では認識と行為と言語の三部門に区別され、それぞれが第6章、第7章、第8章において詳述されている。

4

ここでこれまで紹介したコメニウスの幼児教育論の背景として、三つの著作の相互関係について一言述べておかなければならない。まず『教授学』は1628年頃からチェコ語で書きはじめられ、1632年に完成したが、その後広く世界に普及すべくラテン語で書き改められていく。そして『大教授学』はこの『教授学』の発展と

して1638年に公刊され、『大教授学』の一部を詳述したものが『母親学校指針』であることは、すでに触れた通りである。つまり、これら三つの著作は、ほぼ同一の時期に、共通の理念と目標の下に書かれたものである。したがって『母親学校指針』では健康の問題を重視し、特に1章を設けてこれを論じているという特徴があるにせよ、教育の目的や必要性についての説明は、『教授学』や『大教授学』と基本的に共通しているといつてよい。幼児の教育についても、この基本的に共通する内容から逸脱しているものは、とりたてて見当たらないのである。もちろん細部にわたって検討していけば、最も共通点の多い『教授学』と『大教授学』の間にも多少の相違があることは否めない事実である。チェコ語『教授学』をドイツ語に翻訳したシャーラー (Klaus Schaller) は、その翻訳に寄せた解説論文の中で、「コメニウスの『教授学』のチェコ語の版とラテン語の版との間にある相違はとるにたらないものであるという性急に下された判断を、われわれは再吟味しなければならぬ²⁰⁾」と述べているが、しかし、それは質的に決定的なものではなく、いわば量的な相違といえるのではないかと思われる。つまり、これら三つの著作を書いた時期には、コメニウスの関心は、『教授学』とか『母親学校指針』という題名からも明らかのように、いまだに罪と悪に汚されていない子ども達すべてに対して、すべての必要な知識を同じように教えるための学校と教授の体系の完成に注がれていたのであり、したがって、幼児の教育も本質的に学校前教育という位置づけで考えられているといえるのである。

5

ところで、チェコのコメニウス研究所のチャプコヴァー (Dagmar Čapková) は、コメニウスの示した幼児教育の原理と現代の教育との関連を考察するにあたって、1970年の国際教育年に際してユネスコが掲げた次の三つの理念、す

なわち、①教育を広義にとらえること、②教育は生涯にわたっておこなわれること、③教育はすべての人のためになされること、を紹介し、それらはいずれも300年以上も前にコメニウスがすでに主張していた内容と共通するところのあることを指摘している。そして、とりわけ第2の項目に関連して、「生涯教育こそまさしくコメニウスの思想である」と述べ、この点が、コメニウスと当時のヨーロッパのすべての他の教育者とを区別するものだと強調している²¹⁾。事実、コメニウスの晩年の大作である『人事の改善に関する総勧告 (De rerum humanarum emendatione Consultatio catholica)』の第4部として、1657年以降に執筆された『汎教育』の章だてを見れば、このチャプコヴァーの見解が正鵠を射たものであることがわかる²²⁾。というのは、そこでは年令段階に応じた8種類の学校がまさに人間の生涯にみあうかたちで構想されているからである。『汎教育』は、当時、在英の汎知主義者、ヨアヒム・ヒューブナー (Joachim Hübner) から「学校教育のこののみが述べられている²³⁾」という批判を蒙った『大教授学』とは異なり、学校を卒業して以後の壮年期や老年期の人間の教育についてもそれぞれ1章を設けて論じている。それだけではない。『汎教育』では、コメニウスのそれまでの著作にはみられない「誕生前の学校」という名の章も新たに設けられているのである。これは『母親学校指針』の第5章でこどもの健康について述べた際に、妊婦の生活についても細かく注意を与えていた点を、さらに独立した内容に発展させたものと思われる。それにしても、子どもを生み育てる母親の教育についての関心は、コメニウスの中でどのような経緯から増大してきたのであろうか。

この疑問を明きらかにするためには、もう一度コメニウスの教育および教授法研究の経緯を考えてみる必要があろう。すでに述べた通りコメニウスの生涯を動かしてきたものは、平和と荒廃した祖国の再建のために、まず子どもの教

育が大切であるという確信であった。しかし、当時は子どもを正しく導くことのできる教師が少なく、その上たまにすぐれた才能をもつ教師がいても有力者に備われてその一家の教育だけに終るといった状況であった²⁴⁾。そのためコメニウスは、生来教師に不向きな者でも立派に教授ができるような教授法の改革に心血をそそいだのである²⁵⁾。そして方法的教授をやがて幼児の段階へも拡大しようとするだけでなく、子どもをよく教育するためには、子どもの誕生後のみならずそれ以前の段階も考慮に入れなければならないと考え、母親が心身ともに健康な生活を送ることを期待するようになる。つまり、コメニウスにとって、子どもの教育への関心は、その必然的な展開としてその子を生み育てる親の教育についての考察へと向かわせることになったのである。『汎教育』において、コメニウスの描く教育の世界の拡大は、この意味で彼の教育的実践的関心の帰結であろう。彼は社会人として人生の課題の遂行が大切となる壮年期の学校に、子弟の教育の義務を含めている。こうして『大教授学』では、教育をもっぱら子どもにとって必要なことがらとして、人間を教育されねばならない存在にとらえていたコメニウスの立場は²⁶⁾、今や『汎教育』に至って、人間は教育する課題を負った存在であるというおとなの側の教育の責任の自覚にまで深化され²⁷⁾、それと同時にこれまで教育論の枠外にあったおとなの生活と課題一般の考察が新たに教育学的思考の射程に組み入れられたのである。結局コメニウスは、学令にある子どもの学校教育から幼児教育を考え、さらに幼児教育から両親とおとなの教育の必要へと思考を発展させることによって、一種の生涯にわたる教育の構想に到達したのであり、このような成人をも含めた教育の展望の一部として書かれているところに『汎教育』の幼児教育論の特徴がある。

しかし、『汎教育』にみられる変化の背景はこれだけではない。先に触れたように、コメニウスが子どもの教育を重視するに至った根本的

動機は、世界の混乱を克服し、平和を再建することにあった。そのために、必要なすべての知識を最も効果的に教えるというのが彼の教授のねらいであり、それにはまた統一的な知識体系をつくりあげ、それを人類の共通の陶冶財にすることが必要である。そしてこの自然と人間とに神ついでるすべてを網羅する統一的普遍的な知識体系が「汎知学」であるとすれば、コメニウスの教授法の探究は、同時に汎知学の完成に向かわざるをえないであろう。したがってコメニウスの幼児教育論の推移は、この汎知学思想の発展とも関係があるのではないか。

6

一般に、コメニウスの教育思想の展開を考察する上で欠かすことのできないのは、汎知学思想とのかかわりである。この点についてホルンシュタイン (Herbert Hornstein) は、「汎知学は疑いなく、コメニウスの教育学の理解にとって基礎的意義をもつものである²⁸⁾」と述べ、またイェリネク (Vladimir Jelinek) も、「コメニウスの教育学的見解の展開過程は、本来、彼の汎知学的見解の展開過程の一部であり、彼の教授学の概念の変化は、教育の汎知的な計画についての視野が絶えず拡大していることによって規定されている²⁹⁾」と述べている。元来、「すべてのことをすべての人に教える」という周知のコメニウスの命題にもうかがえるように、汎知は教授の内容として要請されるという関係にあり、したがって汎知学の体系化は教授学の発展に寄与するものと考えられた。コメニウスが『大教授学』を執筆した時点では、今日汎知学の系列に属する著作とみなされるものもすでにいくつかあらわしているとはいえ、彼の主力が教授論の体系化に注がれていたことは否めない。それがやがて、イギリスのハートリブ (Samuel Hartlib) など汎知主義者との交流を通じ、さらに1641年に渡英することによっていっそう彼の汎知学への関心が強まり、ついに汎知学の体系化と教授学の体系化の努力とを一つ

の著作の中で統一的に実現しようとするようになるのである。その成果が、『言語の最新の方法 (Linguarum methodus novissima, 1647)』の第10章に相当する『分析的教授学 (Didactica Analitica)』である。この『分析的教授学』では、『大教授学』で用いられた「類比の方法」とは異なり、「分析的方法」による叙述が企てられている。コメニウスの思想の核心には、神のもとでの究極的な世界の統一と調和という信仰があったが、その信仰の基調となっているのは、神がその真理を人間と自然と聖書の中に啓示しているという「神の三書」の一体性であった。だが、神の三書の統一的体系的な知識である汎知を根拠づけるためには、一書において不鮮明なことは他の二つの書に含まれる相似例によって明らかにするという類比の方法を用いたのでは、結局循環論法的な曖昧さを脱却できない。そこで、より体系的で厳密な、演繹的論理的な分析という形式が必要となるのである。単なる『教授学』からことさらに「分析的」と呼ばれる教授学が書かれたということは、この意味で教授内容としての汎知が、コメニウスの中で学的体系性を備えてきたことの一つのあらわれにほかならないであろう。17世紀における科学技術の著しい発展および学問研究の方法の深化、とりわけイギリスにおける経験主義哲学とそれに基づく経験科学の進展が、実学に関心を寄せるコメニウスの汎知体系の前進に少なからず寄与したであろうことは想像に難くない。「今日、我々は、我々の父よりも多く学ばねばならない。神は我々の前にすべての宝庫を開いている³⁰⁾」という『汎教育』での言表もさることながら、何よりも晩年においてコメニウスが、汎知学に対する研究の成果をことごとく盛り込んだ『総報告』の完成に至ることにこの汎知の広がりや体系化の進展がうかがえる。ところが、このように汎知の体系化がすすむと、それはもはや教授内容として教授学の内でも理解される段階をこえて、逆に教授学そのものも、その展望の一部としてとりこむような関係に変化

する。つまりこのとき汎知学体系は、子どもに対する教授、子どもによる学習の対象という域を出て、人間の生涯における各年齢段階に照応する課題の位置を存在の全体との連関の中で示すことになり、逆にそれぞれの人生課題に対応した教育のあり方を開示するという機能を帯びてくるのである。『汎教育』に至って、いわば生涯教育にみあうシークエンスをもったカリキュラムの具体化の努力がうかがえるのは、このような汎知学思想の発展によって逆に触発された教授学の拡充と無関係ではないのである。

7

これまでのべてきたように『汎教育』では、コメニウスが幼児の教育を、より長い人生展望の中で、とりわけ成人の教育についての関心を発展させつつ考察をすすめている点に一つの特徴がみられたのであるが、『汎教育』には内容的にも、たとえば幼年期における集団保育をめぐって、『大教授学』や『母親学校指針』には見られなかった微妙な変化がある。そこでこの変化が何によるか、次に『汎教育』の第9章「幼年期の学校」を中心に、コメニウスの晩年の幼児教育論の位置を内容的に検討することにした。

この章は、誕生から6才までの子どもの教育の意義と課題を総括的に述べた前半の部分と、さらにそれを六つに区分し各段階ごとの教育について述べた後半の部分とに大別される。その6段階とは、すなわち、Ⅰ. 新生児のクラス(生後1カ月半)、Ⅱ. 乳のみ子のクラス(生後1年半)、Ⅲ. おしゃべりと第一歩のクラス、Ⅳ. 言語と知覚のクラス、Ⅴ. 道徳と敬神のクラスⅥ. 最初の共同の学校、あるいは最初の教授のクラス、である³¹⁾。ここで特に注目すべきことは、最後の段階である4才から6才までの子どもを、家庭の枠をこえて集団的に保育するという考え方が示されていることである。コメニウスはこれをドイツの教師、ハーゼンミュラー

(Sophonias Hasenmüller) から示唆を得たと述べている³²⁾。ハーゼンミュラーは、幼児を年齢によって三つの集団にわけ、それぞれの段階に応じて読み書きの目標を考えていた。しかしコメニウス自身の言明にもかかわらず、チャプコヴァーは、ハーゼンミュラーの影響よりも母親が働きに出ている間、就学前の子どもを小学校へ送り出すボヘミア同胞教団の経験の方を重視して、コメニウスはハーゼンミュラーの思想とは根本的に異った概念を發展させたのだと述べている³³⁾。たしかにコメニウスの教育思想を考察する場合、我々は、彼が敬虔な信徒の子として生まれ、後にはその主席長老までつとめたプロテスタントの一派であるボヘミア同胞教団内での慣習の影響を認めないわけにはいかない。この教団は、「母国語による聖書の学習、全教団員の肉体労働、全教団員の集団的相互教育、それに基づく無位階制³⁴⁾」を四つの原則としていたが、そのいずれもコメニウスの著作に反映していないものはないからである。彼は、4才から6才までの子どもを近隣の有徳の婦人が預かる形態を「半ば公けの学校³⁵⁾」と呼んでいるが、その学校の財政的負担は、子どもを預けている両親が担うものと考えているところをみれば、実際には私的な性格が強いものである。しかし、この学校と同胞教団の影響関係の解明は、同胞教団の教育に関する具体的な資料が不足している現在では、今後の課題とせざるを得ない。

それにしても『汎教育』では、「子どもの最初の保護を両親に帰するのは全く不必要である³⁶⁾」とされており、「6才までは、1人の教師が多数の子どもの世話をする学校に子どもを送り出すよりも、注意深い親の保護が必要である³⁷⁾」と説いていた『母親学校指針』の立場とは明らかに異っている。

この点について、コメニウスは、『母親学校指針』で金や銀と子どもを対比させながら、「金や銀は、ある者から他の者へと交換され、誰のものでもなくみんな共通のものである。し

かし、子どもは神から両親へ特別の財産として贈られたものである。したがって何人もこれを奪うことはできない³⁸⁾」とっており、この「子どもは神から両親へ授けられたものである」というとらえ方が、6才までの子どもの教育は両親の責任に帰するという見方の根拠になっているように思われる。いずれにせよ、『母親学校指針』では、赤ん坊を母親の手から引き離すことは自然の営みに反すると考えていたコメニウスが、『汎教育』では4才以上であるとはいえ、保育を集団で行なうという考えを述べていることは、一つの新しい変化とってよい。

では、この変化は何によってもたらされたのであろうか。それを探るためには、『汎教育』の中の他の成長段階について書かれた章を検討してみることが必要であろう。なぜなら『汎教育』においては、生涯にわたる人間の課題との関連において幼児教育が書かれているとすれば、幼児教育の変化は、他の人生段階の課題、わけても新たに加えられた成人教育の内容と連関があるはずだからである。

8

『汎教育』の第13章「壮年期の学校」の冒頭で、コメニウスは、成人期を「身体も諸能力も十分に発達しており、今や人生の課題に対処しすでに用意されている天職を実際に営み始める³⁹⁾」段階であると定義する。そして、成人生活を、職業の選択と実行と、職業生活を退く段階の三つにわけ、さらに「人生とは……である」という形で、15カ条にわたって自らの人生観をやや羅列的に述べたのち、再び先の三つの成人生活の段階に応じてそれぞれいかなるべきかを具体的に詳論している。コメニウスにとって、人生は「労働」であり、「幸運」や「賞賛の舞台」である一方「闘い」や「安らぎのない活動」や「大風雨」であり、また「誘惑にみちた」「落し穴」であった。そこに述べられている人生観は、総じて職業生活を天職と受けとり

勤労を重視するプロテスタンティズムの人生観であり、その限りにおいてはとりたてて目新しいものではない。それにしても、子どもの教育に明るい人類の未来を見出し、人間に対する信頼に満ちていた『教授学』や『大教授学』のコメニウスが、ここで「闘い」とか「安らぎのない活動」とか「落とし穴」といった暗い表現を用いていることは注目に値する。この変化はおそらく、三十年戦争の推移と関連して、教授学者・汎知学者・平和主義者であるのみならず、常に祖国の再建を念願してきたコメニウスの愛国者としての一面と関連があると思われる。

コメニウスは、救国の一心から、祖国の解放のために援助が必要であると判断した時には、汎知学の基本原理を明らかにしたいという彼自身の主要な関心を一時さしひかえてまでも、支援国から依頼された教授学上の仕事をひきうけた経験をもつほどの人である⁴⁰⁾。その彼にとって、ボヘミア民族の独立を認めない内容を含むウェストファリア条約が締結され、三十年戦争に終止符がうたれた時の心痛はいかばかりであったらうか、察して余りあるものがある。こうした晩年の悲境の中で書かれた『汎教育』の人生観に、他力への依頼と幻想をすてた現実主義的な視点と自主独立の基礎としての職業労働の重視が、前にもまして強められていたとしても不思議ではない。彼は、適切な職業につくことが「魂の救済」のためによいというプロテスタント的職業観のほかに、「我々は天使ではないのだから、ただ身体を維持するためだけでも仕事をすることが必要なのだ」と述べている⁴¹⁾。コメニウスが『汎教育』において、幼児に対しても集団保育を行うべきだと思いついた背景には、おそらくこうした成人の課題の認識と一日も早いそれへの参加という期待がこめられていたのではないか。もちろん、子どもを集団で教育するという考えは、同胞教団の伝統もさることながら、『大教授学』以来、「愉快に、容易に、確実に」という教授法の原則にてらして個人教授よりも集団教授の方が適切であるという

コメニウスの最初からの一貫した立場である。しかし、この時期に幼児の段階にまでその考えが延長されたという背景には、コメニウスの教授学および汎知学思想の内在的な展開だけではなく、先に触れた三十年戦争の推移との関連において愛国者としてのコメニウスが痛感するに至った人生のパースペクティブをはなれてはありえない。そこに『汎教育』におけるコメニウスの幼児教育論の独自の位置があるように思われるのである。(博士課程大学院生)

注

- 1) Robert, R. Rusk, A history of infant education. 2nd. ed. 1951, p. 7.
- 2) 堀内 守, 「各国のコメニウス研究の動向」『名古屋大学教育学部紀要16』, 1970, p.123.
- 3) Franz Hofmann (hrsg.), Geschichte der Erziehung, 9. Aufl. 1969, S. 121.
- 4) Jan Amos Comenius, Grosse Didaktik, hrsg. v. Hans Ahrbeck, 2. Aufl. 1961. S. 47 (以下, G.D. と略称する)
- 5) Jan Amos Komenský, Böhmisches Didaktik, hrsg. v. Klaus Schaller, 1970, S. 51 (以下, B.D. と略称する)
- 6) G.D., S. 88.
- 7) G.D., S. 101.
- 8) G.D., S. 219.
- 9) G.D., S. 208 & G.D., S. 250.
- 10) G.D., S. 47.
- 11) Ibid. & G.D., S. 250.
- 12) G.D., S. 226.
- 13) G.D., S. 79.
- 14) Ibid.
- 15) B.D., S. 194.
- 16) G.D., S. 262ff.
- 17) Robert, R. Rusk, op. cit., p. 14.
- 18) G.D., S. 266.
- 19) Johann Amos Comenius, Informatorium der Mutterschul, hrsg. v. Joachim Henbach, 1962, S. 25ff.
- 20) Klaus Schaller, Comenius und die Pädagogik, B.D., S. 272.
- 21) Dagmar Čapková, The recommendations of Comenius regarding the education of young children; Comenius and contemporary education, ed. by C. H. Dobinson, 1970, p. 20 & p. 30.
- 22) Johann Amos Comenius, Pampaedia, hrsg. v. Dmitrij Tschizewskij, 2. Aufl. 1965, S. 13.
- 23) J. Kvačala, Korespondence Jana Amosa

井ノ口：コメニウスにおける幼児教育論の展開とその背景

- Komenského. I. 1898, str. 73-82. 鈴木秀勇,
「コメニウスにおける Methodus analytica と
Methodus syncritica—V. イェリネクの見解へ
の疑問」、『一橋論叢』, 第43巻第3号, 1960, p.69.
による。
- 24) G.D., S. 51.
25) G.D., S. 288.
26) G.D., S. 81.
27) Pampaedia, S. 115.
28) Johann Amos Comenius, Vorspiele, hrsg. v.
Herbert Hornstein, 1963, Nachwort, S. 172.
29) Vladimír Jelinek, Analytical Didactic of
Comenius, 1953, p. 9.
30) Pampaedia, S. 247.
31) Ibid. S. 255. ホフマンによる『総勸告』の抄訳
では、「Ⅶ. 最初の真の共同学校としての母の膝の
クラス」がつけ加えられている。Jan Amos Kom-
enský, Allgemeine Beratung über die Verb-
esserung der menschlichen Dinge, hrsg. v.
Franz Hofmann, 1970, S. 263
- 32) Pampaedia, S. 275. ハーゼンミュラーは、ラテ
ン語教育に関心を持っていたと伝えられるが、詳細
は不明である。
33) Dagmar Čapková, op. cit., p. 26.
34) 鈴木秀勇, 「ヤン・フスおよびヤン・アモス・コ
メンスキー研究の問題点—チェコスロヴァキアに
おける研究状況をめぐって—(一)」、『一橋論叢』,
第54巻第3号, 1965, p.224.
35) Pampaedia, S. 275.
36) Ibid. S. 241.
37) Informatorium der Mutterschul. S. 68.
38) Ibid. S. 20.
39) Pampaedia, S. 375.
40) たとえば, 1642年にスウェーデンから言語教科書
を執筆するよう依頼された時がそうである。スウェ
ーデンは, 当時ボヘミアの亡命者達の支持を約束し
た数少ない国の一つであった。cf. M. W. Keatinge,
The great didactic of John Amos Comenius,
1921, p. 52.
41) Pampaedia, S. 401.